

2023年度「大村知事と語る会」

1 日時

2023年9月6日（水曜日）午後3時から午後4時45分まで

2 場所

愛知県庁本庁舎 2階 講堂

3 テーマ

障害のある方の社会参加～すべての人が輝き、活躍できる愛知～

4 意見交換者（順不同、敬称略）

	氏名	所属・職等
障害者アート関係	若杉 純一	ネットヨタ中部株式会社 人材開発部 副部長
	野澤 将矢	ネットヨタ中部株式会社 人材開発部 広報係
	野村 重代	ノムラアートクラブ
	深津 早紀	絵画指導者・イラストレーター・デザイナー
障害者スポーツ関係	森下 真理子	第5回世界身体障害者野球大会 日本代表チーム マネージャー
	芦田 創	トヨタ自動車株式会社
	三井 利仁	日本福祉大学大学院スポーツ科学研究科 教授

【知事】 皆さん、こんにちは。愛知県知事の大村秀章です。

今日は、ネットの配信もやっておりますので、ちょっと座らせてさせていただきますね。

皆さんも座ったままで御発言いただければと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、本日は、お忙しい中、この「知事と語る会」に御参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

この会は、毎回一つのテーマを決めまして、そのテーマに関連した分野で活躍しておられる方々から、直接御意見をいただく趣旨で、2011年度からずっと、毎年開催しております。

本日は、「障害のある方の社会参加～すべての人が輝き、活躍できる愛知～」をテーマに開催いたします。

本県では、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合う共生社会の実現に向けまして、障害のある方の自立及び社会参加の支援などの施策を総合的かつ計画的に推進しております。

その一環として、障害のある方のアートの公募作品展「あいちアール・ブリュット展」を2014年度から開催しており、今年で10年の節目を迎えます。

今年は、作品展を来週9月14日の木曜日から18日の祝日・月曜日まで名古屋市民ギャラリー矢田におきまして開催し、舞台発表を9月16日土曜日に名古屋市東文化小劇場において開催いたします。

また、10周年を機に、障害のある方の文化芸術活動をより一層盛り上げるため、来月には、作者の皆様活躍を称える記念式典や10周年記念美術館と称した作品展も開催いたします。この記念行事を皮切りといたしまして、愛知県図書館や愛知芸術文化センターにおいて、来年3月までの長期展示も行ってまいります。

というのが、芸術の分野ということでございましてね。やっぱり一つのことを10年やるとなかなか、いろいろ作品が積み重なってきてですね、また、多くの皆さんに参加していただいて、大変有り難いことだなというふうに思っております。

そして、もう一つ、スポーツ活動でございますが、毎年、全国障害者スポーツ大会に本県選手団を派遣いたしておりますし、愛知県障害者スポーツ大会を開催し、また、総合型地域スポーツクラブなどの協力を得て、障害の有無にかかわらず誰もが参加できる体験会なども実施しているところであります。

また、障害者スポーツを理解し応援する「あいちパラスポーツサポーター」の育成、「あいちトップアスリートアカデミー」において、国際大会で活躍できるパラアスリートの発掘・育成など、障害のある方のスポーツ活動を推進しているところでございます。

そして、今週末には、私ども愛知県が共催している身体障害者野球の国際大会「第5回世界身体障害者野球大会」をバンテリンドームナゴヤで開催する。これは初めて、こちら愛知県で、今までは兵庫県でやったよね。初めてこちらのほうで、名古屋でやるということで、県・(名古屋)市で、しっかりまたサポートしながら、今回の大会開催にこぎ着けることができたということで。多くの皆さんに御覧いただいて、こういう野球なんだということを見ていただくといいですよ。

【森下】 はい。

【知事】 また、後ほどしっかりお話しいただければと思います。

さらに、2026年秋、3年後の秋、9月・10月でございますが、10月になりますけど、2026年10月に「第5回アジアパラ競技大会」の愛知・名古屋における開催も決定をいたしております。こちらの方（ポスター）ですね。これは、アジア大会が4年に1回、ちょうどオリンピックの中間年でやっているんですが、本当は去年の9月・10月でアジア大会・アジアパラ大会と中国の浙江（せっこう）省の杭州、杭（くい）の杭州ね、そこでやる予定だったんですが、コロナで1年延びまして、今月・来月になります。私も行ってまいりまして、旗をもらってこないかなので行きますけど、アジア大会の旗をもらい、アジアパラ大会の旗をもらってきて、いよいよ3年後の2026年愛知・名古屋大会に向けて備えていくということでございまして、これも私も本当に楽しみにいたしております。

何にせよ、障害者アートの展覧会や障害者スポーツ大会などを契機に、障害のある方の文化芸術活動とスポーツ活動を、より一層盛り上げて、障害の有無にかかわらず、「すべての人が輝き、活躍できる愛知」を実現するために、全ての人々が参画し、生涯にわたって活躍できる社会づくりを進めていきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願いいたします。

そして、本日は障害者アートや障害者スポーツの分野で活躍する方々、また、その支援に携わる方々にお集まりをいただきました。限られた時間ではございますが、皆様方の日々の活動内容やその成果・課題、今後の展望など、生の声をお聞かせいただければと考えております。よろしくお願いいたします。

それでは、ここからの懇談会の進行は、私の方でさせていただきます。

それでは、まずは、今日御出席をいただいている皆さんに、順番に、御自身の日頃の活動内容や取組の成果・課題、そして今後の展望・抱負、いろんな思っていることを率直に言っていただけたらと思います。意見交換者の方からお話をいただきたいと思います。

若杉さん・野澤さんから、野村さん、深津さん、森下さん、芦田さん、三井さんの順番にお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、まず、最初に、若杉さんと野澤さんからお願いいたします。

【若杉】 皆さん、こんにちは。

ただいま御紹介いただきました、ネットヨタ中部人材開発部の若杉です。また、本日は弊社で障害者アーティストとして活躍しています野澤将矢も一緒に来ております。

ネットヨタ中部人材開発部広報係の野澤将矢です。

【野澤】 野澤将矢です。

【若杉】 よろしくお願いたします。

今回のテーマであります「障害のある方の社会参加～すべての人が輝き、活躍できる愛知～」ということなのですが、本日は、今日ここにいる野澤さんの障害者アーティスト雇用の紹介ということで、ネットヨタ中部における障害者アートとの関わりから、野澤さんの採用に至るこれまでの経緯と、それから採用後、また、現状での勤務状況とか、野澤さんの活躍について御説明したいと思います。

まずは、弊社の会社概要を少し紹介いたします。

ネットヨタ中部は、名古屋市名東区一社に本社を置いております。資料を御覧のとおり、愛知県の地図の黄色い網かけ部分ですね、愛知県の中心部を営業エリアとしておりまして、愛知県下に新車販売店舗21店舗、うち4店舗は中古車販売も併設しております。また、中古車販売店舗1店舗の、合わせて22店舗を展開しており、トヨタ車の販売はもとより、自動車の点検や修理を事業としているトヨタ販売ディーラーになります。「人が好き、街が好き、クルマが好き」という思いの下に、地域に根差した営業活動をしておりまして、今年で設立から55周年の年になります。

それでは、資料に沿って御説明いたします。

まず、採用までの経緯になります。

弊社が障害者アートの存在を知るきっかけになったのは、2015年になりますが、豊田市内の店舗、プラザ上郷の建て替え工事をお願いしていました建設会社様が、工事現場の囲いのデザインに、障害者のアート作品を採用されていたということになります。また、ティッシュボックスといった自社のノベルティグッズのデザインに作品を採用するなど、障害者アートであるアティックアート活動に、既に取り組んでおられたということを拝見したことがきっかけになります。

弊社も、社会貢献活動として何かこういったことができないかと検討を始めまして、ティッシュボックスやトートバッグ、ポストカード等といったノベルティグッズを作成するようになりました。

このような取組を行う中で、障害者の方をアーティスト雇用している企業様があるということを知りまして、弊社としても、障害者の方を直接アーティスト雇用という形で採用できないかということを検討しておりました。そんな折に、一般社団法人のアティックアート様や愛知県の障害福祉課様に御協力をいただき、2018年2月にアティックアート会員画家である、こちらの野澤さんを採用することができました。

この採用の大きなポイントなのですが、先ほど、弊社の会社概要でも御説明いたしましたが、弊社の事業内容に沿った仕事をしていただくということではなくて、野澤さんの得意分野である絵画を仕事として採用したというところにございます。

続きまして、弊社社員である野澤将矢について紹介をいたします。

野澤さんの障害は、自閉症の知的障害になります。現在は、ネッツトヨタ中部人材開発部人事グループに所属しており、広報係として絵画作品の創作活動をしておりまして、作品を社内外に広く発信するという役割を担っていただいています。

野澤さんの勤務形態については、在宅勤務を基本としております。また、労働時間については、おおよそ週5日の勤務、お昼休みを挟んで1日5時間から6時間ほどの創作活動として勤務していただいています。野澤さんの勤怠報告については、月に一度、勤怠表を提出していただいております。当方で確認をしております。その際には、作品の提出や制作状況の報告も併せて頂いております。会社と野澤さんとのやり取りは、基本メールを活用しております。メールを活用することで、いつ、また、どのようなやり取りをしたか、お互いに分かるようにしているということです。

続きまして、こちらが自宅での仕事の風景になります。

仕事としての創作活動については、作品の内容については、特にこちらからは指定はしておりません。野澤さんが描きたい題材を、自由に描いていただいているといった状況です。題材は、動物や植物、花火とか乗り物など、幅広く自由に描いていただいています。また、創作のペースについても、特に指定はしておりません。野澤さんの自由なペースで進めていただいているということです。作品は、色鉛筆で色をつけたものがメインになりますが、最近は、水彩画や油絵にも挑戦しており、作品の幅が非常に広がっております。また、弊社に入社して、これで6年目になりますが、年々作品が繊細で、かつ迫力のあるものになってきております。

本日は、最近の作品を2点、こちらですね、展示をしております。御覧のように、このように大きなキャンパスでの作品にも挑戦しています。また、先ほど知事からもお話がありました。毎年、「あいちアール・ブリュット展」にも出品しております。これまでも多くの企業様からノベルティグッズに採用していただいております。今年も「あいちアール・ブリュット展」に出品する予定としておりますので、是非、皆さんにも野澤さんの作品を御覧いただければと思います。

続きまして、野澤さんの作品の活用についてです。大きくは二つあります。

一つは、そちらにもありますが、ティッシュボックスなどのノベルティグッズのデザインに活用しております。グッズについては、野澤さんの作品だけではなく、他の障害者アートの作家さんの作品も採用しており、弊社が社会貢献の一環として力を入れている分野の一つにもなります。

もう一つは、作品の各種展示になります。例えば、弊社の本社の通路や面談コーナーにたくさんの作品を展示しております。

御来訪されたお客様や取引先様から絵の質問を受けることも多くありまして、弊社の取組を説明することで、スムーズに本題に入ることができたりといったような効果もあります。また、障害者アートを展示し、自立を支援することを目的とした「まちなかギャラリー」を6店舗のショールームに設けており、常設展示をしております。その中の一つ、名東区のプラザ一社の「まちなかギャラリー」には、昨年、大村知事にも御来場いただきまして、野澤さんの作品を御覧いただきました。また、外部展示として、福祉車両の展示場である、清須にありますトヨタハートフルプラザ名古屋での展示もしております。このように、野澤さんの作品を社内外に展示し、活用しております。

弊社では、御来店いただいたお客様に、野澤さんの紹介パネルとともに作品を鑑賞していただくことで、障害者アートの存在を広く知っていただける、また、弊社が障害者アーティスト雇用を通して社会貢献を行っているということをアピールができていくというメリットがあると考えております。

もちろん、お客様には作品を楽しんでいただいております、とても好評いただいております。

このように、会社のイメージアップにも大きな良い影響がありますし、今回のような、このような貴重な場にも呼んでいただけたら、また、講演会での紹介の場をいただけたら、テレビの取材等していただけるなど、野澤さんが障害者アートの世界で活躍するということで、弊社にとっての宣伝効果は非常に大きいと捉えております。そういう意味では、野澤さんには広報係としての役割をしっかりと果たしていただいているということになります。

このように、弊社は今後も障害者アートであるアティックアート活動を通し、障害者の方々が、自身の得意分野で社会参加ができ、活躍できることを応援できればと考えております。

以上、簡単ではございますが、ネットヨタ中部の障害者アーティスト雇用の紹介とい

たします。御清聴ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございます。

私が一社の本店のところにお伺いしたの、もう去年になりますかね。

【若杉】 去年ですね、2月か3月だったと思います。

【知事】 今年じゃなくて去年。

【若杉】 去年ですね。

【知事】 ああ、そうか。いや、もうそんなになりますかね。ありがとうございます。

大変素晴らしい展示でありますけど、また、よろしくお願ひします。

【若杉】 お願いいたします。

【知事】 後ろにあるのが作品ですね。

【若杉】 はい。

【知事】 だんだんあれですね、だんだん、だんだん大作になっていくんだね。

【若杉】 そうですね。当初は、本当にこれの4分の1ぐらいの大きさということで。動物なんかも、例えばパンダとかライオンとかといった感じだったんですが、最近是非常に複雑になってきていまして、また、すごい迫力があるものになってきています。

【知事】 水彩画ですね、これ、2つとも。

【若杉】 これは色鉛筆ですね。

【知事】 色鉛筆なの。後でまた、近くで見よう。

【若杉】 是非。

【知事】 ありがとうございます。また、後ほど御発言いただきたいと思います。

続きまして、野村重代さん、お願いいたします。

【野村】 よろしくお願ひします。野村と申します。

1975年の3月のことでした。あるお母さんから相談がありました。「兄弟は、習い事などをしているんですが、障害のある子は行くところがない。家から一歩も出ません。何とかありませんか。」という相談がありました。「私でよかったら、ボランティアしますよ。」と申し上げたのがきっかけとなり、現在に至るボランティアの始まりです。

もともと、余暇の活動については何とかしたいと思っておりましたので、絵画、造形等に興味がある子も多く、障害のある子、ない子、そして車椅子の子、言葉が十分でない子などたくさんの子が集まってきました。

「一宮造形教室」と名付けて、公立の施設で絵画制作が始まりました。

これは展覧会の案内状です。子供が描いています。

1981年ですが、だんだんとたくさんの人が通い始め、一般の人や中高生、また、受験生、漫画家志望の人などなど、たくさん、多彩になってきましたので、受講の内容とか数を分けて、一宮造形教室とは別に「ノムラアートクラブ」を設立し、講師のアトリエで始めました。

主として、土日は子供の部、夜間とか曜日を変えて大人の部、というふうに区分けし、笑いの絶えない楽しい雰囲気の中で活動することになりました。

アトリエでの制作ですが、障害の子、そして障害のない子というふうに区別はせず、同じ机を並べて、みんな楽しく絵を描いておりましたので、それぞれお互いの絵、人柄、障害とか全部認め合い、みんな一緒にやろうね、という環境で最初から出発しておりましたので、特に小さな共生の社会が、もう自然に出来上がってきたというような状況です。

野外活動でスケッチに行ったりとか、また、レクリエーションとかクリスマス会などもやって、アートを通じてだんだん輪が広がっていきました。

展覧会を毎年開催しております。私としては、一人一人を大切に、絵をきちんと見てほしいというふうな思いもありまして、子供の絵もちゃんと額に入れて画廊でちゃんと飾って、毎年展示しております。

これは、2005年と2015年の新聞の記事であります。

2014年、いよいよ「あいちアール・ブリュット展」が始まりました。

障害のある子に「出品しますか。」と声を掛けますと、隣の障害のない子が「僕は何で出せないの。」と発言したのを思い出します。ノムラアートクラブでは、既にインクルージョンがもう当たり前になっているので、そういう発言があったのだと思います。

そのときも、複数人が優秀作品に選ばれ、大村知事に直接表彰され、大変、親子共々喜びました。

2017年になり、障害のある人の社会参加の一環として、アート雇用が始まりました。

全国に先駆けて、企業に就労ができる糸口ができたので、さすが愛知だなというふうに感じました。ノムラアートクラブでは、この年に1名、早速、企業に就労ができました。その彼は、5歳からノムラアートクラブへ通っている人で、絵を描くことが生活の一部になっており、今では、表現する喜びにあふれております。この人は自閉症の人です。

さらに、2021年、アート雇用で2名就労でき、更に増えました。就労はできたんですが、なかなか在宅しながら作品を作ることが、絵は好きでも、本人にあまり就職したと

いう自覚がなく、続くのが難しい点がありますので、我々も支援又は指導なしでは継続できないのが難しいということが、現状にあります。就労が最後の目標ではなく、自立が目標であると思いますので、私のところでは、社会の一員としての自立に向けての挨拶やマナー、それから時間を守ることなど、大切な要素を一つ一つ身に付けていくように気配りをしております。

次に、作品を御紹介します。これはアート雇用できた、4名の人の作品です。

1人目（A君）は、後ろに絵を1枚持ってきていますので、御覧ください。

この人は、2022年に就労ができた人で、発達障害があります。年齢は45歳になっておりますけれども、大変繊細な心の持ち主で、A君は、過去の記憶を作品にしています。絵は心の窓とか申しますけど、心の内側を大変細かく表現できる人です。

川を挟んで向こう側に池がありますね。池の中に花が咲いていますけれども、今はとても良い状態にいるということがよく分かります。細かく描くのが彼の特徴です。

後ろの絵も大変細かいので、見づらいと思いますが、御覧ください。

色は、だんだん変わっています。明るくなっております。細かい作品ですので、ゆっくりと後で御覧ください。

次の方は、Bさんは、この人は発達障害があります。そして、油絵を描いています。線表現に特徴があります。線表現を非常に好んで描いておりますので、建物とかを多く描いています。この方は、今年の6月に就労できました。

次の方は、右側のC君。C君は自閉症の子です。見たものを描くのではなく、感じたものを表現しています。色や形に特徴があります。この人が5歳から当アートクラブに通っている人です。

左側の作品は、これはダウン症の子で、この人も就労できています。細かく点描を描いています。色はとてもきれいです。時間はすごくかかりますが、頑張っています。

次の制作風景は、これはA君の制作風景です。細かい葉っぱの一枚一枚とかを丁寧に描いています。

継続するには、やっぱり情緒の安定が大事だと思います。本人の意思を尊重する、また、個性を生かすことも大事で、その人に寄り添った制作パターンを作り出す。それから、やっていることに、子供たちが頑張っているの、肯定的に見てあげる、寄り添って見てあげるといふふうに考えてやっております。

2023年、今年ですが、今年でアート雇用が4名になりまして、皆さんそれぞれ、先ほど

絵を紹介したとおりです。皆さんそれぞれ頑張っています。当クラブも50回の展覧会を迎えることができました。これを通して、多くの人たちに感動を与えたり、また、激励をいただいたり、いろいろ褒めてもらってうれしいとか、そういうこともありまして、アートは社会をつなぐことだなということを実感しています。

しかし、まだまだ、社会の中に溶け込む要素はたくさんあります。活動をどんどん進めていきたいと思います。

当クラブの展覧会の様子は、アート通信というのがありますので、それを御覧ください。後で配付していただければと思います。

ありがとうございます。いろいろと十分説明できませんでしたが、よろしく願います。

【知事】 ありがとうございます。

そうか、もうノムラアートクラブは、1975年からという、これで48年ですか。

【野村】 そうです。約50年です。

【知事】 活動をしていただいて、現在アート雇用が4人になったと。

【野村】 雇用されているのは4人。

【知事】 それは、すごい素晴らしいことですね。ありがとうございます。

【野村】 ありがとうございます。

【知事】 また、引き続きよろしく願います。また、後ほど御発言いただきたいと思えます。

それでは、続きまして、次は深津早紀さん、お願いいたします。

【深津】 皆さん、こんにちは。深津早紀と申します。

まず、配付資料がございますので、お配りさせていただきます。願います。

これから配付はしていただきますが、配付の途中ではございますが、スライドと同様の内容ですので、自己紹介から始めさせていただきたいと思えます。

現在、私は、フリーで障害のある方を中心とした絵画指導や、これらの経験を生かしたイラストやデザインの仕事もしております。

私は、初めは子供の絵画教室で講師をしておりました。その際、障害者支援をしている知人より、障害のある方へのアート指導をお願いされたことをきっかけに、今に至ります。

これまで、生活支援員として、障害者支援施設にて、施設に住んでいる知的に障害のある方へ絵画指導をしたり、個人やアート雇用者への技術指導などを行ってきました。それ

らの一環として、展覧会への出展や運営に携わることもありました。

今回は、その中で一番長く携わった、施設に住んでいる障害のある方たちのアートの発表についてお話ししたいと思います。

展覧会に作品を出展する意味や目的はそれぞれ違って、出展者の数だけあります。

施設や個人の方たちとの制作での関わりや、実際に展示企画に携わった中で、私が感じたアートの発表で得られる三つの大事なことを御紹介します。

アートの発表で得られる三つの大事なこと、一つ目は「楽しい時間を持つきっかけ」、二つ目は「多くの人に見てもらい、認めてもらう機会」、三つ目は「アートを介した社会参加の機会」です。

私としては、この三つが、施設で暮らす障害のある方がアートの発表を通じて得る大事なこととして、印象的でした。

続いて、これらについて、施設に住んでいる知的に重い障害のあるAさんの例を基に、私が経験したことを御紹介したいと思います。

まずは、一つ目の「楽しい時間を持つきっかけ」です。

施設内での自由な時間に何をしたらよいか分からず、何もすることがなくなっていることがあります。そこで、自発的に何かされることのないAさんにも、何か楽しめることはないかと考えました。展覧会への出展を目標に、貼り絵を一緒にしてみることにしました。

初めてやることは、見本をお見せしながら一緒にやってみます。こちらのAさんは、重度の知的障害があり、長い言葉を理解するのが難しいです。そこで、分かりやすい短い言葉でお伝えしています。ちょうどイラストにありますように、「びりびり」や「ぺったん」というような、そんな表現ですね。やってみることで、思ったより楽しそうということや、貼るのも好きそうということが分かりました。作品が完成し、楽しい時間を過ごすことができました。

アートの発表の機会は、楽しい時間のきっかけになるだけでなく、新しいことに取り組むきっかけにもつながっています。

続いて、「2 多くの人に見てもらい、認めてもらう機会」です。

作った作品を展覧会に出展することで、身近な人や家族、来場者など多くの人に見てもらえ、反応をもらえる機会になります。褒めてもらえたときには、ふだんにはないような、とてもうれしい顔をされています。また、賞などをいただき、大勢の前で賞賛してもらい、認めてもらう機会をいただくこともあります。このようなことが自信につながっていった

りします。

そして、「3 アートを介した社会参加の機会」です。

作品を見て感じてもらうことで、多くの方とつながる機会を持てたり、作品をデザインに取り入れたグッズ化のお話があることもあります。アートの発表は、アートを介して社会に参加する機会にもなっています。

実際に、我が社の商品のデザインに使えないかなという声があり採用されたり、作品の感想をいただけたりと、作品を見て何かが伝わることで、アートを介したコミュニケーションを取ることでもあります。

先ほどのAさんの場合、最初はやりたいことでも、やりたくないことでもなかったと思います。しかし、やってみたら楽しかったようです。

施設に住んでいる障害のある方は、地域で暮らす方と比べると、新しい体験をする機会が少なくなることがあります。提供させていただくことの役割は大きく、支援者は常にそれを探しています。やってみることで、楽しみや才能が見つかったり、作品づくりから、それが趣味につながった人もいます。アートを発表する機会は、本人や周りの人にとって大きなものを得るきっかけになることもあるのです。

最後に、おまけとして、出展されるいろいろな作品を紹介したいと思います。出展されるアートは本当に様々で、制作背景も作品の数だけあります。ここでは、いろいろなアート作品の制作背景の五つを紹介したいと思います。

「①みんなでつくったもの、共同制作」です。

施設内での制作に多いのですが、複数人で一つの作品を作ることがあります。それぞれできることや得意なことを中心に、思いのままに取り組みます。最後は、個性のぶつかり合いが面白い作品になることもあります。

「②たくさん描いた作品の中の1枚」です。

同じような絵を、スピーディーに、とにかくたくさん描く方がいます。そのような方は、その中から1枚を選んで出品したりしています。

「③大好きでずっと作っているもの」。

とにかく動物を作ることが大好きで、幼少期より、そればかり作っている方という方がいます。そのため、そのような作品は熟練度がとても高いです。

次に、「④作品としてつくっていないもの」。

本人は、作品のつもりで作っているのではなく、とにかく、その行為自体が大好きとい

うことがあります。なお、出来上がったものを見ると、現代アートのように面白く見えるものもあり、そのようなものを作品として出展することがあります。糸を巻いたり、中にはセロテープを様々な物に巻き付けるのが好きな方もいたりします。

続きまして、「⑤メモやスケッチ、絵日記などの冊子」です。

日々、持っているノートや手帳に、その日あったことや思っていることを、絵と共に描き続けている方がいます。それらは独創性と絵画性が高く、作品として十分な見応えがあったりします。壁に飾る絵画だけにとらわれないのも、面白さの一つです。

以上が、五つの制作背景でした。

先ほど、知事からも御紹介があったように、今年、愛知県で行われている一番規模の大きな障害者アートの公募展「あいちアール・ブリュット展」が10周年を迎えます。来週9月14日から展覧会があるようです。10月には10周年の記念展示があったり、11月以降には、「ふれあいアート展」や「みんなのアート展」という県内のアール・ブリュットの展覧会が続いていきます。そこでは、今、御紹介したものの以外にもたくさんのいろんな背景や楽しみなどの中から生まれた作品に会うことができます。

続けることで、大きなものを得ることがあります。これからも、アートの制作とそれらの発表機会を提供し続けることで、より社会とつながれ、楽しい時間を持つためのきっかけになればと思います。

以上です。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございました。丁寧な御説明ありがとうございました。

学生時代からずっとこうした形で障害者の皆さんへの絵画指導をやっていたという。

【深津】 そうです。

【知事】 ありがとうございます。では、もう10年以上ですね。

【深津】 そうですね、そのぐらいやっています。

【知事】 じゃあ、目に見えた変化というのは感じられますか。

【深津】 絵を描かれている皆さんの変化ですか。

【知事】 御自身もそうですし、絵を描いている人たち、障害者の方もそうですし、世の中の社会の雰囲気も。

【深津】 やはり10年見てきて、最近アール・ブリュットアートはすごい盛り上がってきているなと感じます。この10年で、一気にもう、ここ5年ぐらいはテレビで見ること増えましたし、すごい勢いづいている分野だなと感じます。

【知事】 なるほど。ありがとうございました。

【深津】 ありがとうございます。

【知事】 それは、深津さんはじめ多くの皆さんのお力添えだと思いますので、有り難く思います。また、今年は10周年をやりますので、また、引き続きよろしく願いいたします。

【深津】 お願いいたします。

【知事】 ありがとうございます。

【深津】 ありがとうございます。

【知事】 それでは、続きまして、障害者アートから、次はスポーツということで参りますが、それでは、まず、森下真理子さん、お願いいたします。

【森下】 皆さん、こんにちは。ただいま御紹介にあずかりました、第5回世界身体障害者野球大会日本代表チームのマネージャーを務めさせていただきます、森下真理子です。よろしくお願いいたします。

これまでの自分の経緯や障害者野球に携わるきっかけになったことについてお話ししたいと思います。

また、後ろのスクリーンには何枚か写真も用意させていただいたので、御覧になりながらお話を聞いていただければと思います。

今から7年前の2016年夏、右足の鼠蹊（そけい）部にしこりのようなものがあることに気がつきました。今まで、病気や入院ということには程遠かった自分でしたので、当時は何事もないといいな、とっていました。しかし、悪性腫瘍と分かったのは、初診から5か月後で、病院も3件目でした。病名が分かってからも、悪性腫瘍の細胞を採って生検という検査をしたり、事細かく体の検査をしました。足を切断し、失うということが、徐々に現実のことなのだと思い知らされ、言葉にはできないような気持ちになったことを今でも覚えています。

手術前、友人に病気のことを話したときに、「これから先、どんなことがあって、見た目が変わったとしても、真理子は真理子だからね。良い意味で変わらないよ。」と言ってくれたことがとてもうれしかったです。それと同時に、これからどんなことがあっても、自分なら絶対大丈夫だという気持ちがありました。その気持ちを持てたのは、家族や周りの方の存在がとても大きく精神面での支えにもなっていました。

手術の日は、翌年の2017年2月3日の節分の日に決まりました。

節分ということで、体の悪いものが退治できる日になるな、と思っていました。手術後は、切断部がもうとても痛くて痛くて、苦しい夜を過ごしました。手術後3日でリハビリが始まり、足が固まらないようにと、理学療法士の先生が足を動かしてくれたことには、抜糸前の縫ってある足が裂けてしまうのではないかと驚きながらも、前向きに取り組むことができていたと思うので、自分の気持ちも前を向いているなと思いました。足を失ってしまったことは、自分にとって大き過ぎる出来事ですが、入院、手術、リハビリを通して、たくさんの方にお世話になり、支えていただき、また、新たな出会いがたくさんあり、感謝です。

入院中は、担当してくれた理学療法士の先生と毎日リハビリに取り組みました。足の腫れや断端部の様子を見ながら、最初は筋トレを中心に筋力が落ちないようにしていき、春には義足を作成し、歩行の練習が始まりました。ふだんおしゃべりな自分にとって、リハビリで理学療法士の先生と過ごす時間はとても楽しく、よく「口ばかり動かさなくて、足もちゃんと動かしてね。」と言われていたのも、今では、良い思い出だと思っています。めいっ子もよくお見舞いに来てくれて、自分の励みになっていました。

退院してからの日常の変化としては、左アクセルに改造した乗用車に乗るようになりました。

今の自分にとって、義足の生活は当たり前の日常となりましたが、義足の生活に慣れるまでは時間がかかりました。歩行での転倒を恐れたり、今までは感じなかった道路の凸凹や坂、階段に苦勞し、歩きにくさ等を感じる事が多く、恐怖心もありました。手術後、自分の右足の調子が悪いときは、義足と擦れて痛みがあり、装着しているだけで痛くて、歩けないときもありました。主に、保護テープによるかぶれにより、出血があります。また、断端部に装着するシリコンでできているライナーは、汗をかくと皮膚が蒸れて、痛みやかゆみの原因にもなります。ライナー自体を折り返して使用するので、劣化も早く、購入できる期間になるまでは、修理や補強を重ねて使用しています。ライナーの悩みは、義足ユーザーの方と話していると必ず話題になりますので、義足ユーザーあるあるなのではないかと思っています。

このように、体の変化があっても、今までどおりの生活をする、そしてさらに、自分にできることがあったらしてみたいなと思っていたときに、名古屋ビクトリーのコーチとインスタグラムで知り合いました。私は、この名古屋ビクトリーのコーチと知り合い、障害者野球の存在を知りました。

自分自身が、高校時代に硬式野球部のマネージャーをしていて、野球が好きで、障害者野球にとっても興味が湧きました。そして、自分も強く参加したいなと思いました。実際に参加させてもらい思うことは、みんな非常に元気でパワフルだということ。声を出し合い、野球を楽しんでいるのがとても伝わってきます。また、プレー一つ一つに関しても、スムーズにこなしているように見えますが、それぞれの努力の日々があったからこそであり、このような背景も感じて、胸が熱くなりました。年齢層も幅広く、自分自身もパワーをもらい、とても元気になります。また、できないところはチームのみんなで補い合っていて、一丸となってそれぞれがプレーするところも魅力的だと感じています。チームの中には、同じ境遇の方もいるので、悩みを共有したり、工夫していることや、あんなことやこんなことがあるよね、とたわいもない話もできるので、とても心強く思っています。

続いて、スポーツ義足についてもお話しさせてもらいたいと思います。

お世話になっている義肢装具の会社を通して、今年の2月にスポーツ義足の体験会に参加しました。7年ぶりに走ったり、ジャンプしたり、久しぶりの感覚に気持ちがとても高揚したのを覚えています。恐らくここ数年で一番、気持ちが興奮したのではないかなと思っています。

スポーツ義足を使用した感想は、見た目以上にバランスを取るのが難しく、全身に力が入ってしまい、少し走れるようになったと思っても、10メートルほど走ったところで息が上がり、思った以上に体力を消費しました。そして、翌日には背中を中心に、筋肉痛になりました。歩行に関してもですが、体幹や断端部の振り出し方など、体の使い方は、足だけではなく全身を使っているんだなということに、改めて気付きました。そして、新しく出会ったスポーツ義足のかっこよさにほれほれしました。今後も積極的に参加したいなと思いました。

最後に、今週末の「第5回世界身体障害者野球大会」について、ちょっとお話をさせていただきます。

今年度は、名古屋市のバンテリンドームで、9月9日・10日の土曜日・日曜日に開催されます。今回は御縁がありまして、日本代表のマネージャーとして参加させてもらうことになりました。今年の1月、7月と日本代表のメンバーで合宿を行いまして、愛媛県、福島県へ行ってまいりました。数あるチームの中から日本代表となった選手、監督、コーチ、ほかのマネージャーの中に自分が参加させていただけるのは、とても光栄なことです。マネージャーと一緒に務める方から「できることをみんなでやっといこうね。」と声を掛けて

いただき、うれしく、とてもほっとした気持ちになりました。

チームの中の皆さんがとても温かく、良い雰囲気の中で合宿ができたと思います。真剣に野球に取り組み、頑張っている姿は、みんなかっこよく、自分自身のエネルギーにもなっています。

今回の「第5回世界身体障害者野球大会」を迎えるに当たり、運営の方々や協力してくださるスポンサーの方々、家族や仲間の支えがあるからこそだな、と思っています。周りの皆様への感謝の気持ちを胸に、日本代表チームが4戦全勝して優勝できるように、チーム一丸となって頑張っていきたいと思っています。

私が、最初、障害者野球に出会ったときに胸が熱くなったように、スポーツや一生懸命何かに取り組む姿には、人々に感動を届ける底知れないパワーがあると思っています。今回の大会を通して、一人でも多くその力強いパワーが届くとうれしいです。自分自身も大会の開催がとても楽しみです。それぞれが気合十分な状態で当日を迎えますので、温かい声援をよろしく願いいたします。

以上です。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございました。

名古屋ビクトリーでチームでのマネージャーをふだんやっていて、今回は、世界野球の日本代表チームのマネージャーとして御活躍ということでございますが、高校時代のマネージャーもされておられたということで、障害者野球だと、それについて、やっぱり御苦労というのは特にいかがですか、特に感じますか。

【森下】 そうですね、自分自身のですか。

【知事】 はい。同じような感じですか。

【森下】 そうですね。同じ境遇の方も中にはいるので、共感できることがあったりということはあるんですけども。それに、皆さんすごい一生懸命プレーされているので、もう本当にやることのないぐらいなんじゃないかなと思ったりするんですけど。とても一人一人がすごいです。

【知事】 ありがとうございます。

もう、いよいよこの土、日ですね、この週末ね。素晴らしい大会になるように、また、大いに盛り上げていただくよう、よろしく願います。ありがとうございました。

それでは、続きまして、芦田創さん、お願いいたします。

【芦田】 まずは、このような素敵な機会にお招きいただきまして、ありがとうございます

ます。

トヨタ自動車所属、パラ陸上競技の選手をやっています、芦田と申します。

私、「はじむ」と読むんですけども、まず、1発目で「はじむ」と読んでいただけないです。創立記念日の「創」と書くんですけども、よく「そうさんですか。」と言われるんですね。もし、私の名前が「そう」だとしたら、「あしだそう」。こっちの方がね、陸上選手っぽくて良かったのと違うかなって思っています。すみません、微妙に滑りました。

芦田創です。よろしくお願ひします。

私は、腕に障害があるんですけども、一見、「何の障害なんですか。」とよく言われるので、ちょっとお見せすると、右手と左手の、まず、サイズが全然違います。これは10歳のときに放射線治療をしたので、右腕の成長を10歳で止めました。なので、よく小学校での講演とか行くんですけども、小学校、具体的に5年生ぐらいの子と腕の長さ比べしたら、ほとんど一緒です。なので、まず、右側が子供のようなサイズ感と重さで、左側が大人の筋肉量、サイズ感という中で、ものすごくバランスが悪い中、競技をしています。あとは、腕が細くて、肘が出ているんですけども、まず、肘に障害があること。あとは、肘よりこの前腕と言われる部分は、骨が2本つながっているんですけど、まず1本、取っちゃっています。なので、前腕がぐらぐらしている状態なので、手首の力もほとんどありません。あと指にも障害が残ってしまったので、ずっとテーピングをしている状況です。なので、じゃんけんをするときはパーを出してください、勝てると思いますので。

そのような障害がある中で競技をしているので、陸上競技って0.01秒であったり、1センチを競っていく競技なので、そのような身体障害でバランスが悪いと、パフォーマンスにもかなり影響が出てきます。なので、日頃のトレーニングであったり、どうすれば自分のパフォーマンスが上がるのかなというのは、人よりも、より多く考えながらやっているのがパラの選手の特徴かなと思います。

私の場合ですと、大体重さが2キロぐらい違うので、2リットルのペットボトルを左腕に持って、あえて左腕が重たいような状況で、右側が使いにくいので、トートバッグをかけているような。そんな感覚で走り幅跳びという競技をやっていて、7メートル15という記録を跳んでいるので、大体、学校とかだったら教室の端から端は跳び越えているようなイメージだと思います。一度、この7メートルをメジャーとかで引っ張っていただけたら、結構すごい距離を跳んでいるんじゃないかなと思います。自分が努力をしていく中で、学んできたことがあるので、今日はお話しさせていただきたいなと思います。

まず、私がなぜ障害を持ったかというところなんですけれども、もともとスポーツが大好きな少年でした。ただ、5歳のときに、右腕がぱんぱんに腫れてきたんですね。すごく痛くて、病院に行ったら、デスマイオイド腫瘍という病気を患っていることが発覚しました。このデスマイオイド腫瘍というのが、治療がなかなか困難な病気で、がん細胞を取っても、すぐ浸潤、再発、転移を繰り返す病気で。幸い、私は右腕だけにできたので、命に支障はなかったんですけれども、その中で、小学校のときはもうずっと入退院を繰り返して、オペで骨を取るだとか、いろんなところに治療の中で機能障害が起きていったというところなんです。結局、闘病生活が5歳から15歳まで10年以上続きました。

15歳のときに主治医に言われたことが、「もう創君、治療の手段がなくなったので、右腕を切断しましょう。」と言われて。そのとき、私は「どうせ腕がなくなるんやったら、好きなことをやってみたいな。」ということで、これまですごい運動制限をかけられていたんですけれども、スポーツを取り組んでみたい。真っ先にできることが走るということだなど。お金もかからんし、仲間も要らんし、自分で走ろうと思えば走れるという気軽な気持ちで始めた陸上競技だったんですけれども、そうするとデスマイオイド腫瘍が治ってしまったんですね。ナチュラルキラー細胞じゃないんですけれども、「病は気から」って本当にあるんじゃないかなと思った実体験で。すごく心が明るくなって、気持ちが前向きになったので、私は病気に打ち勝つことができたんじゃないかなと思っています。ただ、治療の過程で機能障害が残ったので、身体障害者という位置づけにはなったんですけれども、そこから、自分が陸上競技に出会ったということは運命だなどと思って、以降、パラアスリートとして活動しています。15歳からですね。なので、今は、現役生活15年になります。

その中で、一番大きな学びだったことが、自分がやりたいことをやって、心が元気になるだとか、好きなことに全力でチャレンジして自分の人生を切り開くというところで、主体的に生きるということはすごく大事なことなんじゃないかなと。これが一番の学びでした。※芦田様が発症した病気に関する治療や医師との会話等は、御自身の経験からの発言となります。

もう一つが、幼いながら自分が、私はすごく軽度障害ですけれども、障害というものに向き合う中で、まず一つ、障害者である本人が強い気持ちを持って生きていかなければならない、ということの理不尽さみたいなことにも、幼少期に感じていたんですね。私が思うに、障害って何なんだろうと思ったときに、その障害者本人にあるのではなくて、本人が自分は障害があると感じてしまう社会サイドに害があるんじゃないかなと思っています。なので、私の活動テーマ、パラアスリートとして一番頑張りたいことは、パフォーマンス

もそうなんですけれども、社会サイドにあるそういった障害であったりだとか、人間にはいろんな可能性があるし、人間、好きなことをいろいろやってもいい、もっといろんな人を尊敬しようよだったり、そういったところのメッセージを、どちらかという発信していきたいので。障害があるけど、頑張れば、やればできるみたいな姿勢ももちろんですけど、それ以上のもっと先にある、もっともっと普遍的な価値というところを自分のパフォーマンスで届けることができたらいいなと思って、活動させてもらっています。

そういった考えの中で、これまでの活動で言いますと、リオデジャネイロのパラリンピック、2016年、出場させていただきまして、銅メダルを獲得しました。2017年、翌年の世界選手権、ロンドンで行われたんですけれども、そちらも出場させてもらいまして、三段跳びという種目と4×100メートルリレー、こちらの2種目で銅メダルを獲得。そして2018年、アジア大会、こちらでメインの走り幅跳びで銅メダルを獲得させていただきました。

東京大会は、自分の人生をかけて挑んでいた舞台だったんですけれども、選考基準に1センチ届かず代表権を逃してしまい、とても悔しい思いをしましたが、今、2024年、来年、パリのパラリンピックがありますので、そちらで自分の悲願である個人種目でメダルを獲得すること、そして、より多くの人を動かせるようなパフォーマンスをしたいなと思って、日々活動に励んでおります。

そして、パリの話をしていただきましたが、もちろん2026年には、アジア大会が愛知・名古屋でありますので、そちらでも金メダルを目指して頑張りたいと思いますし、2021年東京大会は無観客での開催となったので、パラアスリートの活躍というのをリアルな場で届けることってできなかったんですね。それがすごくもったいないな、じゃないですけど、やはり障害のある方のパフォーマンスって、何か言葉にできない、でも、心を動かせるすごい魅力が詰まっている競技なので、是非ともこの大会、2026年の大会が盛り上がることを心から祈念しておりますし、私は、来月のアジア大会、中国・杭州も行ってまいりますので、そこでの経験も踏まえて、2026年、活躍できるように頑張っていきたいと思います。

本日はありがとうございました。

【知事】 ありがとうございました。芦田さん、今も現役なんですね。

【芦田】 現役です。

【知事】 アスリートとして。来月10月の中国・杭州大会も行かれる。

【芦田】 はい、走り幅跳びで。

【知事】 幅跳びで。メインは、今、幅跳び。

【芦田】 幅跳びを、メイン1本でやらせていただいています。

【知事】 今度のパリを目指すのも幅跳び。

【芦田】 幅跳びで、はい。

【知事】 じゃあ、とにかく現役として、また引き続き精進して、更に目標を目指して頑張ってください。

【芦田】 ありがとうございます。良い御報告ができるように頑張ってます。ありがとうございます。

【知事】 ありがとうございます。

それでは、最後に、三井利仁さん、お願いいたします。

【三井】 よろしくお願いいたします。日本福祉大学の三井です。

私のほうからは、「進化するパラスポーツ 『できること』から『やりたいこと』へ」ということで、ちょっとお話をさせていただきたいと思います。

私は、現在は大学の教員をしておりますけれども、40歳まで東京都にあります障害者スポーツセンターの指導員として活動しておりました。その背景としましては、私は小学校から大学まで、もう競技1本、特に高校から大学、社会人まではアメリカンフットボールをやっております、大学時代は日本一を目指すために東海大学の体育学部に行っておりました。その過程で、大学3年のときの実習で、自分で選んだ実習ではないんですけれども、大学の指定実習という形で病院に行きまして、そこで見ました患者さんたちが、運動、スポーツをリハビリとしてやっておったんですが、もうそこには、このスポーツ本来の楽しみ方とか笑顔というものがなく、つらそうな顔でずっとやっていた。学生ながらも、もっとスポーツという楽しみを得ながらリハビリができないんだろうか、ということをおもひまして、就職できませんかということを病院にお願いしに行ったんですけれども、無理と。「無理です。資格ないので。」ということをおわれまして、「君だったら東京出身なので、東京都に障害者スポーツセンターというのがあるから、そこの指導者になったらどうだ。」ということをお受けまして、受けた結果、入職できたという形となっております。そこで、私と障害者スポーツの出会いが始まったわけです。

続きまして、就職当時ですけれども、1986年、かなりもう昔になりますけれども。スポーツセンターといいましても、職場のほとんどの方が福祉系の方、福祉系の大学を出た方で、スポーツセンターなので、利用者の方たちは、専用のスポーツセンターですので、障

害のある人たちやその御家族しか来なかったんですけども、いわゆる私がスポーツというものを展開すると、「彼らにとってそれは苛酷だからやめろ。」とか、ここに書いてあるようなことを場長とか先輩方から言われました。そして、来る方もほとんどの方が、私たちのような形でもできることがありますか、というような問合せで、座ったままで卓球とか、そういったことをやっている時代だった。それが今から40年前です。

ただ、利用者の中には、もっと強くなりたいという若い世代の方とか、もともとスポーツをやられていた方がたくさんいます。そういった方と一緒に、自分がやってきた大学時代のトレーニングの理論とか研究というものを進めていく中で、やはり初めて、「パラリンピックというのがあるんです。」という言葉が彼らから聞きまして、「じゃあ、一緒に目指そうか」とトレーニングを始めたわけです。そういった過程の中で、今日、この写真にも出ているような若い世代の選手たちが一生懸命、汗水を流して、障害があっても競技ができるんだという結果が一つ出せたんじゃないかなと思っております。ただ、この当時は、地域のスポーツクラブとか、学校、公立の体育館なんかは、障害の方はお断りと。何かあったら困るので、ということですとずっと出入り禁止みたいな形になっていたんですけども、(障害者) スポーツセンターというものがありましたので、そういったトレーニングができたという形です。

私は、この2020東京大会、オリンピック・パラリンピックのときは組織委員会にしまして、陸上競技の運営をやらせていただいております。その中でずっと見ていますと、こちらのスライドを見ていただき、白い部分、要は幼少期、ここは、我々にするとスポーツのきっかけの時期になります。いわゆるスポーツ少年団とかスポーツクラブといったところで、親と離れて、手元を離れてやっとなりで幼稚園に通ったりとかいろいろしているときに、遊ぶきっかけができてスポーツと出会う。そして学校に入ると、いわゆる学校のクラブ活動などで選手登録というのをすると、毎日のように練習をする日常化というのが始まります。そしてさらに、中学、高校に行きますと、県の競技団体、陸上、水泳、たくさんあります。そういったところへ登録すると、いわゆる日常練習の中で、強化を目指すというものが生まれてきます。そして、更に強くなりたいという形になると、いわゆる陸上競技で言うと愛知陸協で一生懸命教えてもらったら、日本陸上競技連盟のチームに所属して、日本代表レベルの強化を受けられる。さらに、オリンピックが決まると、いわゆる日本スポーツ振興センター等の最高の強化を受けられるような環境下に入っていく。こういうような、世代ごとにも活動があつて、更に縦ラインでもある。

しかし、パラリンピックはどうなんだろうかと。組織委員会でオリンピックとパラリンピックの選手を両方見ていると、この一番大事なスポーツのきっかけを作るときに、なかなか地域に障害のある子供同士で活動できるようなところもなかったし、いわゆる地域のスポーツクラブなんかにも入れてもらえないというようなことがあって、そのきっかけがなかなか作れない。さらに、当然のごとくですけれども、学校のクラブ活動なんかにもなかなか入れないで、日常化というのもできない。そして、中高のときには県単位で行われた中体連、高体連での強化というのも受けられない状況の中で、やはり上を目指していきたいなどニーズがあっても、なかなか受けられるような環境がなかった。パラリンピックの場合は、こういったところが、一番底辺のところできっとした土台ができていないというのが実情です。

さらに、強化といっても、オリンピックと違ってパラリンピックの団体というのは、まだまだ脆弱で、創君なんかも分かっていると思うんですけれども、やはり自分一人でやらなければいけないということが多々あります。やっと代表の座をつかむと、同じような環境で強化をしてもらえるとというのが実情です。

この一番下のところをよく見ておいていただきたいんですけれども、やはりスポーツというのは、する人、支える人、する場所、楽しめる企画、この4点が充実して、初めてスポーツというのは充実してくると私は思っています。

そして、こちらを見ていただければ。実は、これは文部科学省内に令和4年6月に設置されました、障害者スポーツ振興方策に関する検討チームの報告書の概要です。いわゆる高橋プランというものを載せさせていただいております。

この具体的な方法のところを見ていただくと、スポーツセンター等を都道府県内に充実させるとか、オリパラの団体を一緒にする。そして、5番には、スポーツ参画推進のための大会整備等をしていくということが出ておりますけれども、何と当事者以外のところをお見せしますと、指導者に関しましては、一番多いのが東京都なんですね。名前が変わりまして、パラスポーツ指導員という形になるんですけれども、ここは、都道府県で一番は東京都です。やっぱりオリパラの影響だと思えるんですけど、3,167名います。続いて大阪府1,268。我が愛知県は、全国3位の指導者を登録させております。

次に、場所なんですけれども、全国に障害者スポーツセンター等は、現在、25あるんですけれども、ここに愛知県としての施設が現状登録されておられません。

そして、企画なんですけれども、先ほど来、県のいろいろな企画があると。「あいちパ

ラスポーツサポーター育成セミナー」とか2026年に向けてやっておるので、この企画というのには、非常に愛知県は進んできたなと思っております。先週末、私が管理しているパラ陸上競技連盟としても、こういった健常者と障害者の団体が一緒に大会をやるというのもやってきたので、どんどんどんどん、こういった2026年に向けた活性化する企画も増えているんですけども、あと一つ、今後への期待という形でお話をさせていただければ、我々愛知県としては、する人も充実しています、支える人も全国3位の指導者がいる、楽しめる企画も2026年に向けて充実してきています。する場所というのが、先ほどのいわゆる動機づけ、日常化する場所というのを、何か一つ工夫することによって、これからみんなが、自分がやりたいこと、いわゆる「できること」から「やりたいこと」へ、というものを求めたときに、充実する2026年のレガシーにつながるんじゃないかなと、私は今回、お話をさせていただきました。どうもありがとうございます。

【知事】 ありがとうございます。

東京大会も含めて、押し進めてきていただいたということでございますが、また、引き続き、当面は、来年のパリでありますし、また、3年後の我々の愛知・名古屋大会のアジア大会、アジアパラ大会ということで、また、引き続き何とぞよろしく願いをいたします。ありがとうございました。

それでは、一回りずっと皆さんから御意見等々いただきました。更に加えて、また、皆様方から御発言をいただければというふうに思っております。ということなので、これまでのお話の補足だとか、ほかのメンバーの皆さんの発言に対しての御意見、御質問等、何でも結構でございますので、また御発言いただけると幸いです。

ずっと一回り周りまりましたので、それでは、もう一回戻りまして、若杉さん、野澤さんの方から、また御発言いただければと思います。

【若杉】 それでは、せっかく今日、野澤本人も来ていますので、私から幾つかちょっと野澤のほうに質問をして、野澤に答えていただくということでやっていきたいと思いません。

まず、野澤さん、絵を描き始めたきっかけってどうですか。

【野澤】 幼い頃から動物が好きで、動物園へよく連れて行ってもらって、自分で初めて動物の絵を描いたときに、すごく楽しいと思えたからです。

【若杉】 ということで、今、やっぱり動物をたくさん描いているということになるんですかね。

では、次、これからどんな絵を描きたいというふうに考えていますか。

【野澤】 皆様の心に残るような絵を描いていきたいです。

【若杉】 ありがとうございます。

心に残るということで、みんなが喜んでくれるとか、そんな感じかな。

【野澤】 はい。

【若杉】 ありがとう。

では、最後に、今、ネットトヨタ中部で絵を描いている仕事、仕事として絵を描いてもらっていますけど、この仕事についてどういうふうに思っていますか。

【野澤】 絵を描くことが大好きで、大好きなことが仕事になって、それだけではなく、お給料も頂いて、僕だけではなくて、家族みんなが喜んで、今まで出会った皆様に感謝していて、少しでもネットさんのお役に立てられるように、これからも頑張って絵を描き続けていきたいです。

【若杉】 ということで、もう今ね、正に、本当に十分役に立っていただいているということで、今後も是非続けていきたいと思っているんですが、私ども、先ほどの話の中でお話ししましたが、野澤さんは2018年2月入社ということで、6年です。当初はもちろん、ここまでうまくいくというふうには想像もしておりませんでして、どうなるものかということで始めたんですけども、結果、今、非常に自由に絵を描いていただいている、またそれを、我々も作品を発信ができています。また、多くの方がそれを見ていただいて喜んでもらえているということで、すごく良い循環ができていないかなというふうに思っています。

今後もこういったことをしっかり続けていって、より野澤さんが活躍できるように、会社としてはしっかりサポートしていきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願い致します。以上になります。

【知事】 ありがとうございました。

また、引き続き、野澤さん、頑張って素晴らしい絵を描いてくださいね。また、ネットトヨタさんにも、また引き続きお支えいただきますようによろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

それでは、続きまして、野村さん、お願いいたします。

【野村】 野澤さんにお伺いしていいですか。

【野澤】 はい。

【野村】 おうちでは、どれぐらい、どんなことをやっているんですか。

【野澤】 大きな紙に、たくさん、バランスよく、ものを描いています。

【野村】 そうですか。頑張っていますよね。

【野澤】 はい。

【野村】 分かりました。ありがとうございます。

障害のある子のアートを続けるのに、家庭でどうやっていくかというのが、すごく私は大変だと思うので、ちょっとお伺いしました。頑張っていらっしゃいます。良かったです。

【知事】 よろしいですか。

【野村】 はい。

【知事】 ありがとうございます。また、引き続き、活動のほうでよろしく願いいたします。

【野村】 はい。

【知事】 それでは、続きまして、深津さん、お願いいたします。

【深津】 私と同じアートの分野の方や、ふだんあまり私が携わることのないスポーツの分野の方から、いろいろお話を聞けて、とても勉強させていただきました。

その中で、森下さんにちょっと御質問があるんですけども、よろしいでしょうか。

【森下】 はい。

【深津】 ありがとうございます。

先ほど知事からの御質問でもありましたように、今やっているマネージャー業で何か大変なことはないですかといったときに、選手の方が頑張ってくれているので、特に、本当にすごくやることがないぐらい頑張ってくれている、というお話だったんですが、何か、高校時代にやってみえた野球部のマネージャーと、今回の障害のある方の野球チームのマネージャーをやることで、何か特別にちょっと違いがあるようなこととかはあるんでしょうか。全く同じような感じのマネージャー業をやっているのか、今回の障害のあるチームのマネージャーをやることで、これは今までにはなかったようなマネージャーのお仕事だな、というようなこととかあれば、教えていただきたいなと思っています。

【森下】 本当に自由に参加させていただいているので、マネージャーだからといって、これを絶対やらしてもらわないと、とかいうことでは全然ないので。自分自身もフリーバッティングのときに走れないので、ただ立っているだけになってはしまうんですけども、ボールが来たらキャッチできるようにグローブを持って構えたりしていたりだとか、ノッ

クのお手伝いをさせてもらったりとかということを見せてもらっているの、高校時代と特に変わったことはないように感じるんですけども、高校時代に、先輩からスコアの書き方などを教えていただいたことを思い出しながら、今も、練習試合や公式試合で書いているという感じのお仕事。お仕事というのですかね、そんなような感じで参加させてもらっています。

【深津】 ありがとうございます。すごい和気あいあいな感じなのが伝わってきます。

【森下】 もう本当にウエルカムなところで温かいので。最初はやっぱり、やっぱり男性が多いところだったので、知り合ったビクトリーのコーチが女性の方で、最初はちょっと緊張したんですけども、飛び込んだらもういつでもおいでというか、ウエルカムな感じだったので、とても楽しく参加させてもらっています。

【深津】 みんなで楽しめるチームですね。ありがとうございます。

【知事】 ありがとうございます。よろしいですか。

【深津】 はい。ありがとうございます。

【知事】 また、これからも深津さん、また何とぞよろしく願いいたします。

それで、今のお話であります、先日、私のところに選手の皆さんが来ていただきました。選手で五、六人でしたかね。

【森下】 はい。選手だったり、監督と。

【知事】 監督もコーチも入れてね。本当に楽しい仲間という感じだったんです。非常にみんなののりが良い。年齢層が幅広かったでしょう。

【森下】 広いですね。

【知事】 だからね、やっぱり健常者の野球チームだと、現役の人はある程度若い人に限られるんですけど、非常に幅広かったの。結構、年かさの行ったおじさんもたくさんいたので、それもあって、非常に和気あいあいで、本当に楽しい仲間の皆さんだなという感じがしましたけれども、正にそのとおりなんです。

【森下】 そうですね。本当に野球が好きでやっているだけだよね、とか言ってみんなお話しされているので、そんな感じです。

【知事】 なるほど。そのリラックスしたのりで、この土日ね、勝ち進んでいただきたいなと思いますけど。ありがとうございました。

それでは、また、最後に森下さん、御発言あれば、お願いいたします。

【森下】 ありがとうございます。

今日、この貴重な機会をいただきまして、アートの部門やアスリートの方のお話を聞いて、他の方はこのような活動されているんだなというのが知れて、自分も興味がありましたので勉強になりました。

今、前を見て、視界にずっとあるんですけども、最初にお話があったとおり、野澤さんの絵画なんですけど、色鉛筆で描いていらっしゃるということだったんですけど、何色ぐらい使われているのかなと疑問に思ったので、質問させていただきたいです。

【野澤】 何色ですか。60色です。

【森下】 60色。

【知事】 60。

【野澤】 はい。

【知事】 すごいね。

【森下】 すごい。中には、色をちょっと重ねて、色鉛筆にはないような色を表現したりとすることもあつたりするんですか。

【野澤】 はい。

【森下】 すごい。

【知事】 なるほど。

【森下】 ちょっと今、遠くでからしか見えないので、後でじっくり見せていただきたいんですけども、もうとても繊細ですごいなと感心します。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございました。よろしいですか。

【森下】 はい。

【知事】 これからもといますか、特にこの週末、頑張ってくださいね。ありがとうございます。

【森下】 ありがとうございます。

入場無料ですので、また、皆さん来てくれれば。よろしくお願いします。

【知事】 ありがとうございます。

それでは、続きまして、芦田さん、よろしくお願いたします。

【芦田】 感想なんですけれども、よく私が講演活動だったり、人の前で話すことって結構あつて。ただ、求められるテーマが、多様性であつたり、障害者の理解という部分で話をさせてもらうことが多いんですけども、正直、自分自身の障害のことしか分からなくて。今日も障害者のアートの世界であつたり、野球の世界にしろ、本当に自分以外の

様々な障害のこと、バックグラウンドもそうですし、どういうことを思い悩まれているのか、課題であったりというのは、改めてやっぱり分からないなと思ったので、何か自分が代弁者にならないようにじゃないですけども、よく、もっともっと知識を深めて、適切な発言ができるようにしていきたいなと思いましたし、その障害が有る無しじゃなくて、もっともっと多様性の部分で、本質的な何かキーワードになる考えってあるんだらうなというのは思うので、そこを自分なりに突き詰めていきたいなと思いました。

皆さんにお会いできて楽しかったです。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございます。

芦田さん、まだ、現役のアスリートとして、また、これからも更に次の大会に向けて頑張っていたきたいと思います。これからも期待しております。ありがとうございました。

それでは、最後に三井さん、よろしく願いいたします。

【三井】 今日は本当にありがとうございました。

日頃あまり接することのない方々とお話しできて、その中でも、野澤さんに本当にお聞きしたいことが二つ。

後ろの絵を見ていると、本当、動きがある絵なんですけれども、その絵を描くときって何かを見て描いているんですか、それとも自分の頭の中で、もう完成された絵があってそれを描くんですか。

【野澤】 いや、たくさん図鑑を持っていて、たくさん、本に載っている限りのやつを全部描いています。それ限りのやつを描いています。

【三井】 大体、そのシャチの絵だったら、どのぐらいの時間で描くんですか。

【野澤】 すぐ。細かい色ではないですので、早く塗ることができます。

【三井】 1時間ぐらいで描くやつ、もっと。

【野澤】 いや、そんなにかからないです。

【三井】 何分ぐらいですか。何時間ぐらい。

【野澤】 30分ぐらい。

【知事】 なるほど。

【三井】 ありがとうございました。知事、すみません。すごい興味があったので。ありがとうございます。

【知事】 すごいな、やっぱり。ありがとうございます。

野澤さん、また、是非これからもしっかりと素晴らしい絵を描いていただきたいと思い

ます。

三井さんも本当にありがとうございます。また、これからも、そうか、今も日本パラリンピック委員会の運営委員さんであり、強化本部長さんの現職ですね。ということで、私ども、また、3年後のアジアパラ大会、中国・杭州大会が終われば、次はこちらでありますので。アジアパラ大会をしっかりと進めていきますので、また、引き続きよろしく願います。

【三井】 よろしく願います。

【知事】 ありがとうございました。

それでは、ちょうど時間ということになってまいりました。

一通り皆様からの御意見、そしてまた、お話をいただき、ありがとうございました。私も大変興味深く聞かせていただきました。いただきました御意見等々も含めて、また、しっかりと我々の施策に反映をさせていきたいというふうに思っておりますので、よろしく願います。

障害のある方の文化芸術活動やスポーツ活動が、障害の有無を越えた交流の機会となって、人々に心の豊かさや相互理解をもたらすということを、皆様のお話から改めて確認といたしますかね、実感させていただきました。

これからも、皆様からお伺いしたお話をしっかりと参考にさせていただいて、様々な分野において障害のある方が活躍できるように、引き続き取り組んでいきたいというふうに思っております。

ということで、もう一度申し上げますが、今週末は「第5回世界身体障害者野球大会」ということでございます。私も参りますので、また、是非、素晴らしい大会になることを期待いたしております。

そして、また、その次がこちらだな。「あいちアール・ブリュット障害者アーツ展」、来週9月14日からということでございますので。また、10周年の記念行事もありますので、また、しっかりと盛り上げていきたいというふうに思っております。

ということで、今日御参加いただきました皆様には、今後ますます御活躍をいただきまして、「すべての人が輝き、活躍できる愛知」を我々も進めてまいりますので、引き続き、また、御理解、御支援いただきますように何とぞよろしくお願いいたします。

本日は短い時間でありましたが、大変有意義な機会となりました。御参加いただきました皆様方に改めて感謝を申し上げたいと存じます。

今後とも何とぞよろしく願ひいたします。

今日はどうもありがとうございました。